

その方があるいは素直な訓みかたかもしれない。已は明らかにあやまりである。松枝氏の訓説が他の人々にもうけつがれ、自分の生んだものは、とどろのが定着したようだが、あの手紙の文脈でならば、生れてしまふものは、でも通らなくはない。葉慈奇は、自己生的児女、憲該自己撫養、と解釈するが、これはむしろ松枝説が逆輸入された結果ではないのか。

しかし魯迅がこの句を自分の生んだものは自分が養わねばならぬと読んだかもしないことは、がれの平生の言動からして不思議ではない。そしてそれなら魯迅は、李賀の詩を李賀の意図よりも深く読んだことになるかもしれません。あるいは李賀もまた王琦などの注家以上に深く重くあの言葉を使っていたかも知れぬ。そして、あるいは伝えられるように賀に子がなかつたのではなく「感謝」をうたつたころには子があり、のちに死んだ、ということになるのかもしれぬ。もしそうならば李賀の詩をその観点から読み直す必要がある。

△雑記・47▼

元好問
(上)

1972.7.4.

金の元好問の詩は、初めて接したときからひかれだ。といつても、どう熱心に読んできたわけではない。しかしがれが李賀の詩を熟読したことは確かだ。かれは二十七歳の年から数年、河南の三郷に住んだが、三郷はすなわち賀の家居した昌谷だ、三郷に住んで賀に興味をもつたのがその前から愛読したのか、は知らないが、批評家があまり賀と好問との関係に言及していないのも不思議な気がする。しかし元好問の詩の注を書いた施国邦はさすがに丹念に指摘している。施氏は、李賀詩のすぐれた読者の一人として特筆しておく必要があるだろう。

卷一「王振」の歌題曲に「胡蝶」4213(20857) ◎歌詞は歌心を述べる。以下11曲は歌心歌題列する。運び端 賀春好逝極一「諸樂」¹ 1012(20656) 女之好逝極。歌伴眠歌
一匝 1013(20657) 不眠深溪底。「古鏡」¹ 1013(20657) 天公亦老矣一「金铜仙人辭漢歌」2059(20703) 天知有情
天亦老。
卷二「翻河軒」¹ 1014(20658) 呂嬌歌嬌嬌母一「雁鴨」¹ 4192(20836) 大難歌難難難難
一作歌歌。又「昭昭」¹ 1014(20658) 「曲聲紀往十首」¹ 1014(20658) 狐狽博田道一「守無丑」¹ 4187(20831) 狐狽狹狹古曉漫。歌
瓦瓶歌瓶一「曉園歌」¹ 1019(20663) 出少歌瓶。歌過孫¹ 1019(20663) 番夷錦錦一「十一月歌」¹ 10
32(20676) 離鶯歌班歌帶。歌歌歌歌一「九月」¹ 1019(20663) 桃花虛夜柳歌曲。歌歌歌歌也一「召歌
別張又新翻李漢」¹ 4219(20863) 歌歌田桂園。苏子白祐橘一「歌陳酒」¹ 3141(20785) 長安有男子
心耽橘。
卷三「花竟春三圖」¹ 1021(20665) 翻翻舞天九點煙。「西圖」
畫欄桂樹雨蕭蕭……銅人拂玉露珠水 人生無惜去決絕一「金銅仙人辭漢歌」¹ 1021(20665) 畫欄桂樹懸秋香
天若有情天亦老 穗趙痴女把淚流。
卷四「清書山中」¹ 2100(20666) 主人捧燭客長嘆。「贈徐張家授仲文」¹ 1024(20666) 金答答曲蘭曉曉(施注 七言歌
部有比例長句亦有比例)。「醉酒行」¹ 2100(20666) 相應歌周首作醉歌者。白竹殷紅十二花驟一「金銅仙人辭漢
歌」¹ 3164(20666)。「當日殊生四十尺旅榜管……」四歲未有三歲強一「梅園」¹ 1049(2069
3) 三十未有二十餘。「贈杭州侯神龜」¹ 1049(20693) 詞譜灰蘚生梅園「高軒過」¹ 1049(20693) 歌名死海生梅園。「折長
御薈」¹ 1049(20693) 桂樹秋香月三五。「金銅仙人辭漢歌」¹ 1049(20693)。「太極歌張秀喜」¹ 1049(20693) 間隔騎鶴去燕沒一「仙樓歌」¹ 20
96(20740) 旗安騎鶴波去「君自曲」¹ 5236(20880) 間乘白浪騎鶴風。

ついに掲げる記事は朝日新聞の昭和四十七年七月六日夕刊にてしたものである。これを、拙稿「走馬引」の注とする――

「(1)のような劇的な行動を取らなければ、私の平和を望む声はB52の爆音にかき消されて、だれも聞いてくれないでしょ。私はパンアメリカン航空841便でハノイへ向います」――去る二日、マニラからサイゴンへ向うパンアメリカン航空のジャンボ機を乗取ろうとして機内で射殺されたベトナム青年・グエン・タイ・ビン(ヨ)から犯行直前に米国で投函したとみられる手紙が五日、朝日新聞社に届いた。アジア、歐米、アフリカ、オーストラリアの主要新聞、雑誌にあてて公開書簡だといつこの手紙は、ベトナムの惨状を日々と訴え、米軍の行黒をきびしく糾弾して、乗取り計画にいたる心境を詳細に述べている。

手紙の中での自己紹介によると、タイ・ビンは四年前、米国際開発局の奨学金者として成績学金について渡米、シアトルのワシントン大学に学ぶ学生だった。だが、一昨年夏、南ベトナムに帰つて全土を旅行したとき、ビンには米国の侵略戦争ではないか、というかねての疑問が確信に変わった、という。

米国にもどって反戦運動に積極的に参加。そのため先月奨学金を取消され、米国から退去命令が出されていた。

手紙は、まずベトナムの反植民地闘争の歴史から、「」、ディエントンマー、ジュネー

ア協定などにふれたあと、米国独立宣言の一節をひいて「いま米国のしていること、その理想と正反対のことだ」と鋭く告発。せまい国土に第二次大戦で使われた全爆弾より三倍もの量の爆弾を降り、すでに百五十万人以上が殺され、三十万人の孤児が生れ、森林の七分の一が枯葉作戦で不毛の地にされており、とくわしく数字をあげて惨状を述べている。

手紙はタイアでびっしり四ページ。棄取リについては「劇的な行動」としか書かれていないが、「私はけつして罪のない人を傷つけない」「米国は大量殺人兵器を使っているが、私は堅い憲法と不屈の精神だけで闘う」と記されている。「バンアメリカン航空 841便」という部分だけは、ペン書き、あとからつけ加えられたものだった。

この手紙の通り、彼はレモンの包みを爆発物だといつわって「ハノイへ行け」とおどしたわけだが、サイゴン空港に强行着陸させた機長にあっさり取押えられ、そこをさらに乗客の一人にピストルで射殺された。射殺した男は、サイゴンの米企業に派遣された特別任務の米警官だったといふ。

この手紙には、米国の新聞に載った反戦を訴える本人の写真入り記事の写しと、ニクソン大統領にあてた書簡の写しも同封されていたが、その書簡は「私の名はタイ・ビン。二わけ平和といふ意味です」という書きだしから始つて、こんな言葉で終つていた。「私の『爆弾』は、良心を呼びさせる人のだしがないので此」。

以上である。クエン氏の手紙の全文を、朝日新聞はなぜ掲載しなかったのだろうか。

1972.7.7. -1

范淳（一九〇二—一九五〇）という人を、李鍊とのやりににおいてでなければ、わたしは、知りうともしなかつただろう。知つてみると（「どうほどよく知つているわけではない。わたしの例の道聽途說」だが）、なかなかのクセモノである。『四部叢刊』続編集部に『范香溪先生文集』二十二巻が收められ、「これがその現存作品のすべてであるらしい。巻八に「迷春曲」がある。

春光 春光

勧汝一盃酒

我能爲春作高歌
未解春能聽歌否春歸育底急
落盡桃花紅
圓躡漠漠野陰時
免葵蒸夢空搖風
風光幾何時
背我忽如客
殘緣欲斷感春心
語無勞勞上兼頭

春さん 春さん

まあイッパイやりたまえ

わしはあんたに歌うてやれるが

あんたは歌を聽けるかどうか

あんたはなんでせかせか帰る

桃のくれないみんな散らして

桜はぼうぼう野はひそりと

いえにれとからすむき風にゆづくら

風と光はちよゝとして

わしにおさらばまるで旅の衆

なごりの絶えだえに春の心がかなしきうて
燕ぐつたり すだれにどまる

我有惜芳意

一春博物華

春來雪裏索梅笑

春去懷空飛楊花

春歸知復來

奈此斷年別

搖楊三月暮天愁

鶯鶯一聲芳草歇

歌罷我亦醉

一棹觥船空

明年待春在樹下

放歌擎酒相迎逢

穿簾の集を読んだ人のある人なら、二つが「詩畫集」(3161)(20805)のかえうで、さうに簾の他の作からふんだんに好語をやどめて来たものである。そこで見わけるだとう。

春融融效事長吉體

天曉地媚春融融

化工點染分花容

東風夜半入香陌 雞樹曉繁爭白紅 蘭蕙蕙根芳翠滴 柳

鬢明眉輕翠隱

紅顰綠鬢青春客

臺中新醜鴨頭色 残縵冉冉如織 日暮低迷草蕙聲

わしには花がいとしうて

春には景色が愛らしきう

あんたが来たら雪の中でもさがしたものさ梅のほほ笑み

あんたが去んだうなげいたものさ空とぶ揚の花のむれ

あんたは帰る また来るとかつていても

どうしよう ひととせのこの別れ

楊柳うりう三月の日暮さびしく

はととぎす一声ないて草の花ちる

歌はおしまい わしゃ醉うた

大きかずきももう空じや

来年もあんたを待とつ花の樹の下

放歌擎酒相迎逢 歌うて 飲んで また逢いましょう

穿簾の集を読んだ人のある人なら、二つが「詩畫集」(3161)(20805)のかえうで、さうに簾の他の作からふんだんに好語をやどめて来たものである。そこで見わけるだとう。

黃蘆鼠鬚秋風肥 鬼雨灑草南山悲 長途客子動愁肺 住往門難多思歸
我兄豈不感時節 東床卷席將何之 自言南州有元帥 據鑒本是陽秋皮
薦紳奔走欲定價 一見許我奇男兒 捩斬表奏置戎幕 使我坐壇官機宜
高生所媿國士知 不辭歸熱向武威 我今去路雖千里 敢以驅
馳負知己 南州最盛齊東都 昔人欲語停盈餘 地重空秀多異產
臺頑甚 蜂屯蟻雜棘終梳 聖朝神化與換骨 託事草籍免根株
有餘 腰間長劍生銅吼 可贈寧王伏暑狗 後當歸路持旌麾 六印黃金大如斗

一説、少年の心にやきつき、もはや自他の区別もつかなくなつて、歌い出せばそこには少年のものとなつた李賀が洩れ出る、といつた感じである。巻九に。

三月廿六日夜同姪端臣端累歲異書效李長吉體

楊花亂落青春暮 無排簾旌傍人語 縹臺買酒洗春愁 回風落日夢花舞
燈照字驚蠅魚 冬烘老生時自唄 安用盤盂學田蚡

四月十六日同弟姪效李長吉體分韻得首字

黃梅雨歇春歸後 摺桑哺雞鳴吸婦 紅殘小顎蹊上汎 翠刷滾眉頭柳
豪絶音還舊牘 雪容凜凜曉陰愁 夢信風前一搔首

李賀の語を使用する作品けほかにもあるが、引くのはこれくらいにしておこう。巻八に「籍興四首」がある。後の走向をのべて興味ふかい。その第二首、

乞火固得火

不如鑄燧多

寄汲非無泉

鑿井泉盈科

君子貴自得

顧豈求之他

心焉有餘師

奈彼自弃何

自分を行かしてどうするか

こうした考え方の人だから、浚は、李賀の詩を愛したのだろう。しかし、それならば、浚がいつも昌谷の水を汲んでいるのは自己撞着である。かれは、賀を模倣しないどころで、かなりいい詩を作っている。だが、かれは詩においてよりも批評においてその詩を發揮する人だったようである。

浚は生前ほとんど無名の人であったらしい。その名がひろく知られるようになったのは、朱熹が『孟子章注』の告子上の大人と小人を論する条の注に浚の「心鏡」の全文を引いたためであるという。朱熹はまた浚のために小伝をつくっている。

范浚（字は茂明、婺州（浙江省金華県）蘭谿の人。香溪に隠居したので、世間では香溪先生とよんだ。もと、この人があれに従つて学んだのか、知らなかつたが、その學問はたいへん

火がほしければ火種はあるが
火打石きつたがまじや

汲ませる泉がないではない

井戸を掘つたら溢れるものを

男は自分でかせぐんだ

ひとのものなどほしがらぬ

心に余計な先生いろまい

自分を行かしてどうするか

正しい。うちころ浙江の学者といわれる人々は官僚や政治家として出世することを尊ぶが、決だけは聖賢の心を学ぼうとする志があり、ほかのことなど少しも羨むことなく、政府の招請をことわり宮界に入らなかつた。著作の文章は多く五經に本づき、諸子学、史学をしまじえ、易、書、春秋についての考索はみな伝注の形をとり、前代の学者の意旨がなかつた点を発明している。當時家塾をひらき生徒が数百人、わたしの郷里からも遊学する者がいた。わたしにはかつてしばしば訪問したが、会うことことができなかつた。近ごろ始めどこの人の学行の詳細を父の友の呂伯恭どのに聞くことができたので、小伝をのべ四方の学者にお知らせする。明の畫品がさらに詳しい伝をつくり、わたし自分がさきに記した生卒年は、それによる。さらに、伝がう加える。浚が官界に入らなかつた有力な理由の一つは、金との和議を主張した秦桧が當時の宰相だったからだ、という。

范浚の儒学について考えるいとまは、今のわたしにはない。だがかれは、唐の太宗を論じ、李孝逸を論じた文章をのこしている。李賀にかかわることとして、ここに紹介しておかねばならぬ。

太宗批判として「唐論」^{卷四}、「房杜不言功論」^{卷五}をとる。「唐論」の趣旨。

堯が天下を領有しこれを子の丹朱に伝えず舜に授けた。舜もまた天下を領有しこれを子の商均に伝えず禹に授けた。子を愛しないからではなく、子が不肖でこれに位をゆければ天下がその害を蒙ることを恐れたからであった。唐の太宗は讒言を信じて承乾太子を廢し、晉王（のちの高宗）を順序をこえて太子とし、その懦弱で社稷を守りえないことをうれい、異母を立てようとする。

しかも晋王の伯父の長孫無忌の反対にあってやめ、のちこれと謀している。太宗はかつて晋の武帝を讃嘆し、子を知る者は賢父、臣を知る者は明君、不肖の子を忍んで捨て国家を安んずることこそ聖賢の道だつた……といった。だが、太宗が憐弱の子を立て墨斷の子を殺したのは、國を安んずる道であつたのか子を愛する道だつたのか、則天武后的革命とそれにともなう唐皇室の悲惨は、太宗に由来する。

「房杜不言功論」の趣旨。

唐の太宗が天下を取るには、房元齡と杜如晦の力によるところが多い。だが二人は終に自らの功を言つたことがなかつた。一時は二人が、世を救済する心はあつたが功を立てる心はなかつたためだ。だが一回、功臣が功を自ら言つたために、あるいは獄死し、あるいは斬殺され、あるいはとがめをうけ、あるいは疑われたのを前車の轍としたため、太宗は功臣に対してもだかつて恤れみを加えたことはない。

骨格を抜き出したので、原文の深沈な味わいは消散したが、論理の大体はあやまつていなければ

ろう。

李孝遂を論じるのは「設淮陰先生說李孝遂論時年二十」^{き十九}で、淮陰先生なる人物を假設して李孝遂に説きすすめるることは、どうほどの憲、かなり長いものだから、これも論のすじの換われないように気をつけながら縮約する。

唐の光宅元年、柳州司馬の李敬業らが江都で兵を起^こし、城を攻^{こう}して武后的罪惡をせめ靈陵

王（中宗）の復位を呼びかけた。武后曰、左玉鈴衛大將軍梁郡公の李孝逸をつかわし、これを討たせた。淮陰先生が孝逸をたずねて問う「軍隊の出動には名分がなければならぬ。敬業起兵の名目は何ですか？」孝逸「天子の復位です」先生「では將軍が二れを討つのはなぜですか？」孝逸「敬業は左遷されたはらいせに反乱し、復位の名をかたつてゐるだけだ」先生「敬業は反乱者です。しかし敬業の罪と武后的罪と、どちらが大きいでしょう。いま武氏ははじ二、でいますが、その三十万の兵力を將軍に与えたのは、天が奪つて李氏に権力を授け唐を復興し武氏一族を滅ぼさうとされるのです。將軍がこのとき兵を西にかえし唐主の罪を問あうとせず、敬業討伐を急がれるのは間違っています。敬業は、本心はどもかく、名目は復位です。將軍が皇室の近い親族でありながらこれを討てば、天下の人の忠義心を沮喪させることになります」孝逸「先生のいわれるようないことはわたしも考えてゐる。だがわたくしの軍隊はもとからの部下ではなく、人の考えもさまざままで、口先でいえるようなものではない。わたしが西に向おうとしても、一人が反対と叫べば三十万の軍隊は動かすわたしは失敗だ」先生「ああ、そうではありません。武后は國權を益み、殘刻で、天子は名のみ。天下の人は歎ぎ、しりしていきます。敬業らが兵をあげるとたちまち十万の兵があつまり、各地の人は武装して敬業の到来を歓迎していきます。これは唐を戴く氣持のあらわれです。まして將軍は皇室のご親戚。その上、大軍は事を起すに足る、人民のたれが將軍につかないことがありますようか。しかもなおうまくいかないならば、わたしは切腹するなり首をはねるなりして将軍におわびしましよう」孝逸「先生のいわれることは尤もだが、敬業を逃すわけに

はわかぬ。先生の計略はしばらくのうちに考えることにしてよう」先生「いや、事には時機といつもある。武后には革命して天子になろうという志がある。武后的立つ前にどうしておやりにならぬか。將軍は灌嬰のことをごぞんじないが。外戚の呂氏が權力をにぎり、漢は危機に瀕している。齊の哀王が孫產討伐の名目で兵を起した。孫產は灌嬰をやつてこれを討たせた。灌嬰はここで者の軍を破つても、呂氏の利益になるだけだ、と考え、者と連合して呂氏をうつた」孝逸は武後の知遇を思つて決意がつかめ。孝逸が意見を受け入れることを見てとり衣を脱つて去り、「こいつはアゴヒゲをくつつけた女だ。天下の計を語るに足りぬ」とい、自ら舌をかみきつた。孝逸は敬業を殺し、武承嗣にくまれ、流されて死んだ。武后は革命して周とした。

この文章には後記がついている。

壬寅の歳、わたしは故友鴻臚・文虎と、夜、書の孝逸伝を読んだ。文虎がいう「孝逸は王孫だのに唐のことが念頭にないようなのはなぜだろう。大義を教えてやる者もいかつたのか」わたくし「この時、皇族で孝逸よりすぐれた人は地上に存在せられなかつた。孝逸でなければ將にはならなかつたさ。あいつは武後に知遇をえていたから、口をすっぱくして言つても、聞くぞ」そこで「淮陰先生の李孝逸を説く詩」なるものを仮設し文虎の心を鼓舞しようと思つたのだ。それから十八年になる。かつて李叔易に示すと、叔易「大した演説だな。きみのほがの文章とけ似てないね」わたしは文虎のために作つた文だと、叔易「や、ぱりそんなことか」といつた。庚申十月三日、たまたま旧文をよみ、文虎をしのんだが、その人の骨枯ちて久しい。叔易も近